

論文題目：『一貫した看護過程の展開』に向けた実践の質」自己評価尺度の開発

—交代制勤務をする病棟看護師の確実な看護過程展開に向けて—

研究目的は、病棟看護師が「『一貫した看護過程の展開』に向けた実践の質」を測定するために活用できる自己評価尺度を開発し、その信頼性・妥当性を検討することである。尺度の開発手続きは、①質的帰納的研究成果に基づく質問項目の作成と尺度化、②専門家会議の実施、内容妥当性指数の分析、パイロットスタディの実施による質問項目の検討と修正、③調査による尺度の信頼性・妥当性の検討である。尚、本研究は、妥当性の検討方法として、Messick が提唱する考え方を採用した。そのため、尺度の開発手続き①②により、妥当性の内容的側面の証拠を表す結果を備えていることを確認した。

1次調査は、無作為抽出法を用いて探索した病棟看護師 934 名に質問紙を郵送し、566 名から回答を得た。このうち、有効回答 552 部を分析した。その結果は、 α 係数が 0.929 であり、尺度の信頼性を備えていることを示した。また、これは、妥当性の一般化可能性の側面の証拠を表す結果を備えている可能性が高いことを示す。さらに、各項目を除外した場合の α 係数が 0.925 から 0.930 であり、妥当性の本質的側面の証拠を表す結果を概ね備えている可能性が高いことも示した。

主成分分析の結果は、第 1 主成分への寄与率が 34.6%、第 1 主成分に対する負荷量が 0.339 から 0.730 であり、30 項目全てが第 1 主成分に 0.3 以上の負荷量を示していた。これは、本尺度が 1 次元性尺度の基準を満たし、妥当性の構造的側面の証拠を表す結果を概ね備えている可能性が高いことを示す。また、本尺度と「看護師の問題解決行動自己評価尺度」の総得点の相関係数は、0.707 ($p<0.001$) であった。さらに、既知グループ技法の結果は、5 仮説中 2 仮説が支持されたことを明らかにした。これらは、妥当性の外的側面の証拠を表す結果も備えている可能性が高いことを示す。

2次調査は、ネットワークサンプリングにより探索した病棟看護師 65 名に再テスト法を依頼した。その結果は、尺度の総得点の相関係数が 0.781 ($p<0.001$) であり、信頼性を兼ねた妥当性の一般化可能性の側面の証拠を表す結果も備えている可能性が高いことを示す。

本尺度の特徴は、病棟看護師にとり、「一貫した看護過程の展開」に向けた実践がどのような実践なのかをイメージしやすく、実際に行動に移しやすい項目から構成されていることである。また、「『一貫した看護過程の展開』に向けた実践の質」を高められれば、看護問題の解決を導きやすくなる可能性が高いことである。

本研究の限界と課題は、分析の結果、一部課題を残した質問項目 1・4・8 の表現の検討や洗練をすることである。また、「一貫した看護過程の展開」に向けた実践をどれだけ適切に実施できているかを測定できる尺度を開発することや、本尺度の活用可能性を裏付ける結果を集約していくことが今後の発展的課題である。